歴史地理学調査報告　第8号　1～31　1998

港町銚子の機能とその変容
―荒野地区を中心として―

舩杉　力修・渡辺　康代

Ⅰ　はじめに

本稿は，千葉県銚子市の荒野地区[1]を中心に，港町の形態を復原し，近世から昭和初期にかけての港町としての機能およびその変容について，予察的に考察することを目的とする。

従来，歴史地理学では，藤本利治が封建都市という観点から，近世の港町は，自由都市的な特色があるものの，城下町の外港機能を果たすものが多く，封建体制下の社会機能の一端を担っていたことを指摘している[2]。山田志乃布は，近世の松前地江差を事例として，19世紀前半の港町の機能が遠隔地商品流通における物流の結節点であったとしている[3]。最近では建築史の分野からも，都市空間論から港町の空間構造について研究がなされている[4]。しかしながら，形態と機能とがそれぞれ別々で論じられる傾向があるため，港町全体の性格を十分には明らかにしてこなかったと考えられる。そこで本稿では，形態・機能の両面から港町を検討することとする。具体的には，まず港町の形態を復原し，それと機能との関係について明らかにすることとしたい。

一方，歴史学の分野では，近世においては主に問屋の資料，近代においては府県統計書を使った研究がみられる[5]。こうした資料から，港町，ひいては流通の具体像を押さえていくことが第一義的であることは勿論であるが，港町には問屋をはじめとして，多くの商業機能が存在していた。港町の性格を明らかにするためには，問屋を含めた町全体の機能を描くことが必要であると考えられる。さらに，一問屋の資料の分析に終始すると，港町が流通構造のなかでどういう位置づけであったのかといった相対化が難しくなる可能性がある。そこで本稿では外からみた銚子，すなわち，銚子の資料だけでなく，銚子と取引のあった東北地方の資料を活用し，銚子と東北地方との関係や，東北地方からみた銚子の具体像を提示することとする[6]。それによって，銚子の港町としての存立基盤が明らかにできると考えられる。

本稿で取り上げる千葉県銚子市は，現在醤油醸造業と日本有数の漁港を有する都市として有名である。近世には主として，飯沼・新生・荒野・今宮の4ヶ村で町場が構成されていた(第1図)。享保2年(1717)以後，上野高崎藩領となり飯沼村に陣屋が設置された。近世には東北諸藩の廻米や海産物が扱われ，東日本では有数の港町であった(第1表)。実際，明治7年(1874)の人口は，飯沼・新生・興野・今宮の4ヶ村で17,688人に及び，その数は関東地方では東京・横浜・水戸に次いでいた。明治22年(1889)には飯沼村が本銚子町，その他の3ヶ村が銚子町となり，本銚子町・銚子町・西銚子町が合併し，銚子市が誕生したのは，昭和8年(1933)のことであった。

これまで銚子については，主に水産業・水産加工業[7]，醤油醸造業[8]，利根川水運[9]という観点から研究がなされてきた。特に醤油醸造については，林玲子による一連の研究によって，近世～近代の醤油醸造業の展開が明らかになっている。銚子港に関しては，渡辺英夫がその成立過程，川名登が御穀宿・廻船問屋といった港の商人像を明らかにした。しかしながら，銚子の都市的性格については，市街地が4ヶ村にもわたり広大なこと，第二次世界大戦の戦災により，市街地のほとんどが焼失したことなどにより，これまであまり明らかにされてこなかった。

そこで本稿では，通時的に港町銚子の範囲と機

能について検討し(第Ⅱ章)，次に銚子の商業中心地であった荒野地区を事例に，町の形態を復原し，江戸への廻米輸送が顕著であった近世に焦点をあて，商人の経営の具体像から港の機能について検討し(第Ⅲ章)，廻米輸送か途絶えた近代に銚子のもつ港町の機能がどのように変容を遂げていったのか(第Ⅳ章)について明らかにすることとしたい。

Ⅱ　銚子港の範囲と機能

1）銚子港の範囲

従来，「銚子」港の指し示す範囲については諸説があった。これは明治22年(1889)に市町村制施行に伴い，銚子町及び本銚子町が発足するまで，「銚子」とは町村名ではなく，通称地名であったことによる。「千葉県銚子港沿革誌」[10]によれば，「銚子」の区域として，利根川下流域と銚子半島の東端の11ヶ村(飯沼・新生・荒野・今宮・松

本・本城・長塚・辺田・三崎・小川戸・高神)，9ヶ村(飯沼・新生・荒野・今宮・松本・本城・長塚・小川戸・高神)，利根川下流域の8ヶ村(飯沼・新生・荒野・今宮・松本・本城・長塚・松岸)，7ヶ村(8ヶ村のうち松岸を除く)，4ヶ村(飯沼・新生・荒野・今宮)といった5つの説を挙げ，最終的には，町場を形成していた4ヶ村，すなわち，明治期における本銚子町と銚子町が該当するとしている(第1図)。筆者も都市としての「銚子」については，この4ヶ村が妥当であると考えるが，港町としての機能はこの4ヶ村だけにとどまらなかったと考える。

明治43年(1910)発行の「千葉県銚子港全図」[11]によれば，この4ヶ村のほかに港として利根川沿いの松本・本城・長塚・松岸の4ヶ村が記載されていることが注目される。特に本城・長塚・松岸には，入江が描かれ，河岸としての景観があった。実際，松岸・本城には遊廓があり，長塚には高瀬船停泊地があった[12]。また「銚子領十七ヶ村記録」には，本城村の項に「当村者江戸往来筋也，

第1図　研究対象地域
(明治17年迅速図を使用)

此所ゟ飯沼江壱里余，飯貝根浦迄町家続凡壱里半余」とあり，幕末には，本城村から飯沼村の飯貝根浦まで町屋が1里半ほど連続していたことが分かる(第1図)。さらに，松本・本城・長塚村は明治22年(1889)に伊豆原村となるが，明治24年(1891)には西銚子町と改称したことも注目される。以上のように，西側に位置する松本・本城・長塚・松岸の4ヶ村も港の機能の一部を担っていたことが想定される。以下，各村がそれぞれ港町としてどのような機能を有していたのかを，通時的に考察することとする。

2）港の機能

a．松岸村

松岸村は，高崎藩領ではなく旗本朝倉領であった。利根川に接する下町に河岸があり，そこには廓のような形態がみられ，遊廓があった。『利根川図志』には「銚子往来旅人此河岸より揚がる，淫肆ありていと繁昌なる地あり」とあり，松岸には遊廓が5軒あり，銚子へ船で来る旅人は松岸河岸から上陸していた。木下河岸から香取・鹿島・息栖三社参詣など利根川下流を遊覧する「木下茶船」は，銚子磯めぐりの際には，銚子松岸の上州屋長兵衛を指定宿としていた[13]。遊廓は，こうした銚子を訪れる旅人をはじめ，銚子の漁民や来銚する漁民，銚子へ米穀・槙・野菜を運ぶ周辺農村の百姓を客としていた。その成立時期については不明であるものの，遊廓の一つ青野屋は，享保期(1716～36)の新田開発の際に他所から松岸に移住したと伝え，初代青野屋徳兵衛は享保20年(1735)に他界していることから，遊廓成立もその前後であると想定される。松岸遊廓は，本城村と同様，元々は廻船洗濯宿，槙問屋であったが，後に遊女を置くようになって，周辺農村の百姓が松岸を通過する際に遊女屋に誘い込まれることが問題となっていた[14]。明治15年(1882)の銚子汽船会社の開業の際には松岸は寄航地となり，明治31年(1898)の総武線開通後も引き続き繁昌していたが(写真1)，昭和初期には衰退し，昭和16年(1941)に解散式が行なわれた[15]。以上のように，松岸村は利根川を下る旅人が船を降りる地点，つまり銚子の玄関口であった。

第1表　近世における銚子港の位置づけ

	西	東
大関	肥前長崎	相州浦賀
関脇	志摩鳥羽	長州下関
小結	紀州綱不知	筑前博多
前頭	越前三国	安芸広島
同	出羽酒田	肥前名護屋
同	出羽秋田	長門　萩
同	越前敦賀	備前岡山
同	津軽青森	安芸室住
同	越後新潟	安芸御手洗
同	出羽本庄	阿波徳島
同	能登福良	石見浜田
同	**下総銚子**	丹後由良湊
行司	泉州堺・奥州松前・佐州相川	
世話役	奥州三馬屋・摂州兵庫・伊豆下田	
勧進元	江戸(品川・鉄砲洲)	
	駿州清水湊	
	大阪木津川・安治川両川口	

林　英夫・芳賀　登編(1973):『番付集成』，人文社，102ページより作成

b．長塚村

「銚子領十七ヶ村記録」[16]には「右村江戸往来也，茶屋有之，此村ゟ鱸漁師蛎取多出ル長塚蛎与て名物，蜆も澤山ニ取レ」とある。集落は街道に沿った街村となっていた(第1図)。利根川では牡蛎や蜆が採れ，南の台地上に用水池があることから，半農半漁の村であった。村の西端，長塚新

写真1　松岸遊廓第2開新楼の中庭
(永澤謹吾氏提供)

田(西町)に入江があった(第1図)。この入江は文化5年(1808)に椎名与惣右衛門が掘ったもので，銚子と佐原・土浦・高浜・関宿・江戸との間を結んでいた高瀬船や伝馬船が風波を避けるために設けられた停泊地であった。こうした停泊地が形成される以前は，比較的風波が穏やかな所に錨を下ろしていた。毎日40～50艘の船が停泊したという。その結果，入江付近には旅籠屋・茶漬屋・煮売屋米問屋・槙問屋などが形成された。特に，煮売屋の牡蛎の吸物は長塚村の名物であった。「銚子領十七ヶ村記録」をみると，江戸三河町の三川屋小右衛門，白土屋長五郎が「長塚村蛎灰屋冥加金金拾五文」を納めていた。明治15年(1882)の銚子汽船会社開業以来，入江は衰微した[17]。

c. 本城村

本城村は，長塚村と同様東西に集落が展開していた。本城村の下町以東は飯沼村の飯貝根まで町屋が連続していた(第1図)。本城村は利根川河口より約1里西方に位置するため，潮の関係や船つき虫の問題などにより，東北地方から入港する200石積や500石積といった大船が停泊するには条件がよく，大抵の船はここで錨を下ろした。こうした船によって，銚子地方の産物である甘藷が売られ，材木・米・麦・薪炭などが銚子にもたらされた。その結果，本城に旅籠屋ができ，船夫の宿泊などで大いに繁盛した。幕末には旅籠屋が5軒あり，うち三島屋は三島，川口屋は江戸近在，大藤屋は大坂からの移住者であった。大藤屋利兵衛は宝永2年(1705)の移住で，分家3軒が本城村下町に屋敷を構え，1軒は米麦を扱い，1軒は薪炭を扱い，1軒は酒食を商っていた。このうち酒食を商っていたのが大藤屋利兵衛であり，衣類の洗濯なども行なった。正徳3年(1713)には三島屋・川口屋らとともに，飯沼村笠上にあった遊女屋を移転させた[18]。このように，本城村は18世紀初期から，仙台船の銚子来航とともに廻船の停泊地となり，その結果船夫を対象とした旅籠屋，遊廓といった商業機能が生まれた。

d. 松本村

本城村に続いて東西の街村となっていた。近世には松本村は大込とも称し，高崎藩領ではなく旗本大村領に属していた。享保5年(1720)に八手網が7張，元文4年(1739)に6張あり，近世中期には荒野・飯貝根・黒生・外川とともに，鰯を捕る漁業集落であったことが分かる(第2表)。文化7年(1810)には猪牙船が飯沼・飯貝根・新生・今宮村とともにみられ，その数は7艘で，船役として1艘につき銀18匁，計98匁納めていた[19]。

e. 今宮村

「銚子領十七ヶ村記録」では「荒野村ニ続能町也，商人多シ，目出度町通ハ芝居之通ニ而賑成所也，諸家之津出シ役人詰ル所有(略)，青物問屋其外旅宿有，都而此邊売もの等品々在賑敷町場也」とある。集落は基本的に東西に連なる街村であったが，荒野村に接する目出度町のみ町割が南北に延び，都市的景観を形成していた。東北諸藩の廻米を扱う御穀宿は，幕末の銚子には6軒あり，うち1軒宮内与惣左衛門が今宮村にあった[20]。米や一般商荷物を御穀宿などの問屋から買い請ける「仲買」は，天明3年(1783)には今宮・荒野・新生・飯沼の4ヶ村で154株あり，うち今宮村には

第2表　八手網の数の推移

享保5年(1720)		元文4年(1739)	
松本浦	7	大込(松本村)	6
荒野浦	18	荒野	3
飯貝根浦	42	飯貝根	24
黒生浦	3	—	—
外川浦	45	外川・犬若・長崎	54

(単位：張)

「千葉県銚子港沿革誌」より作成

第3表　天明3年(1783)における仲買商人の株数

組　名	株　数
今宮村組	39
荒野村西組	41
荒野村東組	41
新生村・飯沼村下組	33

岩瀬利助家文書「穀仲間帳」より作成

39株あり，その数は荒野村に次ぐ数であった(第3表)。正徳5年(1715)に江戸堺丁杵屋九郎三によって，当時芝地であった所に芝居小屋が創設され[21]，遊廓と同様，銚子へ来る船夫や旅人を迎え入れる機能を有していた。今宮村の西端にある入江は唐子船入場と称し，近世末期の創設といわれ，川船の避難港として機能していた[22]。

一方，明暦2年(1656)には紀州広村の崎山次郎右衛門が飯沼村へ移住，その後今宮村に移住し任せ網を開始し，寛文元年(1661)に今宮村から高神村へ移住している。今宮村には，宝永6年(1709)に旅八太網が29帖，享保2年(1717)には7帖あった[23]。したがって，近世中期には紀州・摂州などの漁民による漁業集落としての側面も有していた。明治19年(1886)の漁業税の内訳によれば，今宮村では川雑魚税45銭とあり，川漁が明治期まで存在していたことが指摘できる(第4表)。

f. 荒野(興野)村

「銚子領十七ヶ村記録」では「町商人多シ何茂問屋也，銚子第一之町也，小路多シ，旅宿方之都而売買ハ此所ニ而専売也，町人も能町人多し」とある。実際，東北地方の米を扱う御穀宿は，6軒のうち5軒が荒野村にあり，東北地方の一般商荷物を扱う「気仙問屋」は，5軒のうち4軒が荒野村にあった。天明3年(1783)には米などを問屋から買い請ける仲買は，荒野村西組・東組で82株あり，銚子にあった仲買のうち荒野村の両組が半数以上を占めていた(第3表)。つまり，荒野村は銚子のなかでも，東北地方との物資の中継地としての機能を有していたといえる。荒野村には，造醤油屋が銚子領内で13軒中9軒と集中しており，中でも広屋重治郎(ヤマジュウ)，広屋庄右衛門(ジガミサ)，広屋儀兵衛(ヤマサ)といった紀州出身の造醤油屋があったことが注目される(第5表)。集落は利根川に沿った東西だけでなく，南北にも展開していた(第1図)。明治期に入っても，郡役所・町役場・警察署・税務署・郵便局といった行政機関をはじめ，東京～銚子間を結ぶ銚子汽船株式会社とその荷扱所，豊国銀行・川崎銀行・銚子銀行などの金融機関，醤油工場(ヤマサ・ヤマジュウ・ヤマヤマ)といった商工業もみられ，銚子の中心地であった。

g. 新生村

飯沼観音から西へ続く通りに展開する街村であった(第1図)。実際「銚子領十七ヶ村記録」においても「飯沼観音江之通り也」とある。延宝6年(1678)の「新生村佃銭上納，高上村砥石山請負につき覚」[24]には「新生村飯沼村者古来一所ニ而」とあり，かつて新生村と飯沼村が一村であったとみられる。新生に在住の木戸秋氏は，貞享年中(1684～88)に田中玄蕃の家普請の際に，玄蕃家から大工木挽として雇い入れられ，上総国から新生村に移住したと伝えている[25]ことから，新生村には飯沼村名主の田中玄蕃の招きによって移住したものが存在したことが指摘できる。

また「銚子領十七ヶ村記録」には「此処漁師多

第4表　村別にみる漁業税の負担(明治19年度)

	高神村	飯沼村	新生村	今宮村
八手網税	130	80	—	—
棒受網税	35.50	31	—	—
雑魚税	17.50	78.50	51.50	—
鰹釣魚税	51	28	—	—
鮑取税	1.275	—	—	—
川雑魚税	—	—	0.60	0.45

(単位：円)

千葉県海上郡教育会編(1917):『千葉県海上郡誌』，千葉県海上郡教育会，475～476より作成

第5表　安政5年(1858)における銚子領内の醤油醸造家

村　名	人　名
飯沼村	柳仁平治，田中玄蕃
荒野村	広屋重治郎，広屋庄右衛門
	塚口屋太兵衛，広屋利右衛門
	宮原屋太兵衛，飯田屋半兵衛
	飯田屋吉兵衛，広屋武左衛門
	広屋義兵衛
野尻村	彦兵衛，義左衛門

「銚子領十七ヶ村記録」より作成

し」とある。宝永6年(1709)には新生村に八太網があることが記され[26]，文化6年(1809)には，縄舟が飯沼村，飯貝根村を合わせて102艘あり，新生村干鰯場運上金として金2分を納めていた[27]。明治19年(1886)にも漁船66艘あり，そのほとんどが釣用船で，雑魚税・川雑魚税を納めていた(第4表)。明治33年(1900)には銚子～新生間に貨物線が開通し，銚子で生産された〆粕・魚油・醤油が新生駅から輸送された。

h．飯沼村[28]

飯沼観音下に位置し，商業集落を主とした飯沼村と，利根川沿いに展開し漁業集落である飯貝根の，大きく2つの集落から構成されていた。飯沼村には，村の草分けで名主をつとめた田中玄蕃が居住し，高崎藩の陣屋が置かれた。元禄17年(1704)には船溜のある飯沼村和田町に遊女屋ができた[29]。文化6年(1809)には人口は6,216人を数え，その数は飯沼・新生・荒野・今宮の4ヶ村合計12,519人の約半数を占めていた。また，当村には干鰯場運上金・塩浜年貢・縄船役・塩船役が課せられていた[30]。文政年間(1818～30)には，飯沼には河岸と和田船溜，飯貝根には河岸・納屋場・船引場に対して冥加金が課せられていた[31]。享保5年(1720)には飯貝根浦に八手網が42張存在し(第2表)，明治19年(1886)にも八手網税・棒受網税・雑魚税・鰹釣魚税を負担しており(第4表)，各々その数字は漁業集落，外川のある高神村に次ぐものであった。飯貝根は「銚子江諸国船之入口」にあたるが，利根川河口付近は暗礁が発達していたため，廻船の難破が多かった。そこで河口の水先案内をする「引船」が生まれた。その役は飯貝根の者がつとめ，嘉永年間(1848～54)には引船仲間が25人存在した[32]。近世～明治初期にかけて猪牙船等の木造小型漁船が銚子でも盛んに造られた。こうした船大工は紀州や伊勢出身のものが多く，飯沼村，特に現在の川口・内浜・飯沼町に分布していた[33]。

以上のように，銚子港は8ヶ村にも及ぶ広大な港であった。集落の構造は荒野村・飯沼村を除けば，基本的に利根川に沿った東西の街村で，村ごとに複数の「町」を形成していた。それぞれの村には港の機能の差異がみられた。すなわち，御穀宿・気仙問屋・仲買といった商人が存在し，東北地方の商品を江戸・関宿などへ中継する機能を有していたのは，荒野村を中心とした飯沼・新生・今宮村，東北地方からの廻船の停泊地は本城村，江戸・関宿などへ向かう高瀬船の避難港は長塚・今宮村，遊廓は飯沼・本城・松岸村，造船業は飯沼村，漁業集落としては，海漁が飯沼・新生・荒野・今宮・松本村，川漁が新生・今宮・松本・本城・長塚村にみられた。この8ヶ村のなかでも，東北地方と江戸・関宿との結節点としての機能を有していたのが荒野村であった。以下荒野村を中心に港町の形態と機能について考察を進めることとしたい。

Ⅲ　近世における港町の形態と機能

1）港町の形態

明治20年(1887)の荒野村地籍図[34]によれば，当時の小字名とその範囲が記載されている。このうち，町場を形成していたのは，納屋場・下富田屋町・下穀町・下明神町・万町・竹町・東通町・通明神町・通穀町・上富田屋町・上穀町・袋・山中・前田・東芝横・東芝下・西芝下・東芝上・西芝上であった(第2図)。明治期に確認できる町名はいつの時点にまで遡れるのだろうか。浄国寺の資料によれば，宝暦～明和年間(1751～72)に地名として記載されているのは，穀町・袋町・前田町・山中町・宝満寺横町・芝町・富田屋町・明神町・上穀町・竹町・万町・橋本・通明神町・下穀町・通町・通穀町であった。近世の宝満寺横町と橋本，明治期の納屋場を除けば，近世と明治期とで地名はおおむね一致している。したがって，18世紀中期には荒野村がすでに複数の「町」から構成されていたと判断される。荒野村は文政年間(1818～30)には2,955人，明治5年(1872)には3,568人の人口を有していた[35]。この数は明治7年

十軒党

a	石橋嘉兵衛	h	渡辺彦左衛門
b	武井藤兵衛	i	浜野長七
c	宮崎嘉左衛門	j	渡辺治左衛門
d	広半(大木)		
e	鵜月八郎左衛門		
f	丸山若右衛門		
g	梶山藤左衛門		

穀宿

A	信太清左衛門・同権右衛門
B	鵜月庄蔵
C	大里庄治郎

醤油醸造

1	濱口儀兵衛
2	古田庄右衛門
3	岩崎重次郎

船宿

α	木屋新介
β	浦賀屋

第2図　明治20年(1887)における興野村の地割
(法務局所蔵地籍図及び現地調査より作成)

(1874)の時点において，潮来・水海道・境といった関東地方の一河岸の人口をしのぐ数であった[36]。

町場の形成時期を暗示する資料が白幡神社に存在する。白幡神社の境内社，庚申神社の裏手にある元文5年(1740)正月の庚申塔には，荒野村の町割が延宝2年(1674)に着手され，翌3年に定まったとある。また同境内には，「下総国海上郡荒野村村中男女惣供養」と記された延宝8年(1680)の庚申塔があることから，17世紀後期には村を単位とした庚申講が存在していたことが確認できる。

町場は威徳寺・宝満寺などの寺院を南限としていた(第1図，第2図)。寺院の由緒を検討すると，大慈寺(西芝下町，曹洞宗)は宝永元年(1704)の開基と伝えている。宝満寺(山中町，浄土真宗)は寛永年中(1624～44)に相模国三浦郡三崎町より移転，当初西方寺と称していたが，宝永4年(1707)に宝満寺に改称した。妙福寺(東芝横町，日蓮宗)は正徳5年(1715)に香取郡入山崎村より移転，本堂は享保年中(1716～36)の建築という[37]。また，荒野村にも檀家を多く有していた浄国寺(浄土宗)は，荒野村の南に接する辺田村にあり，寛永5年(1628)に庵を結び，寛永14年(1637)には檀家は20軒であったのが，寛文5年(1665)には700軒と急激に増加したという[38]。以上のように，荒野村に存在する寺院には，17世紀中期に開基と伝える寺院もあるが，檀家を獲得し銚子に定着したのは，17世紀末期～18世紀初期であったことが共通して確認できる。実際，他国出身の広屋(濱口)儀兵衛や行方屋(大里)庄次郎が銚子に移住したのも17世紀末期のことであった。したがって，延宝期(1673～81)に町割が形成されたとみるのはおおむね妥当であると考えられる。

次に，町割の具体像であるが，第2図によれば，白幡神社を中心とした東西の道には，東通町・通明神町・通穀町と，いずれも「通」の名前が付けられていることが注目される。実際，この「通」はおおむね短冊状の地割となっており，「通」にはヤマサ・ヤマジュウ・ジガミサなどの醤油醸造家や，行方屋庄次郎・鵜月庄蔵などの御穀宿が屋敷を構えていた。一方，東北地方からの米を納める米蔵があったと想定される下穀町・通穀町・上穀町は南北に列なっているものの，町の境界は不規則であった(第2図)。したがって，延宝期の町割整備とは，白幡神社を基準とした東西の街路の形成であった可能性が高い。

2）草分けの存在

荒野村には「十軒党」と称する組織があった。これは東芝・西芝に居住していた百姓が構成するもので，石橋嘉兵衛(西芝)・武井藤兵衛(西芝)・宮崎嘉左衛門(西芝)・丸山若右衛門(東芝)・梶山藤左衛門(東芝)・渡辺彦左衛門(東芝)・鵜月八郎左衛門(東芝)・広半(大木姓，西芝)・浜野長七(東芝)・渡辺治左衛門(東芝)の10軒であった(第2図)。その他に，高谷・村田屋(信太姓)・石屋(高橋姓)などもその構成員であったという。十軒党は庚申講や恵比寿講などの講中を形成していた。東芝・西芝には他にも百姓があったが，彼らはその構成員ではなかった。鵜月・浜野以外は，いずれも荒野村東芝上町の威徳寺の檀家で，彼らは本堂脇に墓所を持っている。

荒野村の鎮守白幡明神の祭礼の際には，十軒党の一人石橋嘉兵衛が幟をあげないと祭礼は始まらなかった。十軒党は翁と天狗の面を所持し，神輿渡御の際に露払いをした。神輿の渡御は2日間にわたって行なわれたが，1日目の夜は東芝で泊まることが通例となっていた。つまり，白幡明神の祭礼の運営において，十軒党は重要な役割を果たしていたことが読み取れる。

十軒党の在所は，元々は東芝・西芝ではなく，荒野村の中心地である白幡明神付近であったと伝えている。祭礼の際に幟をあげた石橋嘉兵衛は神社の北の下明神町，丸山若右衛門は同じく下明神町で，石橋嘉兵衛の屋敷の道を挟んで東側，武井藤兵衛は下富田屋町に居を構えていた。なかでも，武井藤兵衛は，約400年前に紀州広村から移住，広屋藤兵衛とも称し，半農半漁であったが，延享年間(1744～48)に漁業をやめ，西芝へ移住し百姓となったと伝えている。

19世紀以降，醤油店広屋儀兵衛は江戸と銚子に

おいて積極的に土地を購入した。天保13年(1842)に下明神町東側の120坪を芝町丸山若右衛門から，安政5年(1858)には下明神町南側160坪を芝町渡辺治左衛門から購入している[39]。丸山，渡辺は十軒党の構成員であり，白幡明神周辺の土地を19世紀中期まで保持していたことが注目される。

広屋儀兵衛は元禄6年(1693)に紀州広村から銚子に来住し，元禄13年(1700)年に荒野で醤油店を開いた[40]。その際儀兵衛は村田屋(信太姓)で草鞋を脱いだという伝承がある[41]。村田屋とは，ヤマサ史料に「大屋」として登場する信田太郎右衛門であるとみられ，天明2年(1782)に商売が難渋した際，地代1年分を月割で支払うことを取り決めているように，儀兵衛の地所は寛政8年(1796)に金150両余で買い入れるまで借地であった[42]。元禄16年(1703)の「年々宝治帳」によれば，創業当時儀兵衛は，「信田平兵衛」から30両，「広屋藤兵衛」から13両など借入金があった[43]。仙台廻米のことについて記載した貞享2年(1685)の「信太平兵衛雑録」が明治期において御穀宿信太権右衛門家に所蔵されていた[44]ことから，信田平兵衛は仙台藩の御穀宿であったとみられる。広屋藤兵衛とは十軒党の一つ武井藤兵衛であった。さらに，十軒党の鵜月八郎左衛門は元々今宮村の出身で，初代「卯月内蔵之丞」は寛文9年(1669)に没している。その檀那寺である今宮村柳町の東岸寺(真言宗)には，正徳元年(1711)に「卯月八郎左衛門」が単独で寄進した青銅製の盧舎那仏がある[45]。

以上のように，十軒党の構成員は荒野村の草分けとみられ，17世紀後期に広屋儀兵衛といった紀州移民が来住した際には，土地及び資本を提供した。彼らは次第に村の南にあたる東芝・西芝へ移住し，地主・百姓として活動したと考えられる。

こうした草分けの存在は今宮村においても確認することができる。今宮村の鎮守若宮八幡宮は，五木田三郎左衛門・山口三郎左衛門・宮内与惣左衛門が元寇の難を逃れ，福岡の筥崎宮の分霊を奉じて摂津今宮に祀った後，今宮村に移住し，草分けである浅川与兵衛らと協力して，天正3年(1575)に今宮村を興し，鎮守として勧請したのが始まりと伝えている。今宮村三軒町のいわれは五木田・山口・宮内の3軒が町を開いたことによるという(第3図)。八幡宮には「若宮八幡宮鍵前順達帳」[46]と称する帳面が入った帳箱があり，その裏には「天正三年八月十五日初り」として，浅川与兵衛・五木田三郎左衛門・山口三郎左衛門・宮内与惣左衛門など11名の名前が記されている。「鍵前順達帳」とは，帳箱に記載のある家を中心とした百姓18軒が八幡宮の鍵箱を月ごとに守る際の当番を記したものである。3軒の檀那寺は東岸寺で，その一軒である五木田家には万治3年(1660)の五木田平左衛門の墓がある。今宮村の商業の中心地は荒野村と接する目出度町であり，正徳5年(1715)に芝居小屋が開設されている。一方で，草分けと称する家は三軒町に分布し，百姓として土地を所有し，氏子組織の中心的存在でもあった(第3図)。つまり，17世紀中期には草分けが存在し，彼らに頼って紀州移民が来訪し，次第に町が拡大していったと考えられる。

3）港町の機能

次に，史料の残存する幕末を対象に，荒野村の有していた諸機能について，主に『千葉県銚子港沿革誌』を素材として復原していくこととしたい。

a．納屋場

利根川に接する村の北端部を納屋場と称し，短冊型の地割となっていた(第2図)。納屋場には明治・大正期に次のような伝承があった。『海上郡誌』には「今宮・荒野・新生等は初め専ら漁業を営み，沿川の地は納屋場と称し，漁民の住する所なりしが，漸次商工に転業するもの多く，鰯漁は専ら飯沼・高神の二村に限ることゝなりし」[47]とある。また『銚子案内』によれば「荒野ヨリ今宮マデ半永久ノ納屋ヲ数十棟建設シ遠洋漁業ノ数隊ハ屯集(略)，其中ニモ勢力ノ比較的アリシ如キハ荒野村甚兵衛納屋，孫助納屋，與四郎納屋，今宮村ノ堂之納屋，権三郎納屋，三四郎納屋，庄右衛門納屋，新右衛門納屋等アリ」[48]と，納屋に

草分け
A　浅川与兵衛　　C　五木田三郎左衛門
B　宮内与惣左衛門　　D　山口三郎左衛門

第３図　明治20年(1887)における今宮村の地割
(法務局所蔵地籍図及び現地調査より作成)

は人名が冠せられていた。すなわち，納屋場は当初漁業のために形成されたが，次第に商工業に転化し納屋としての機能が消滅していったものである。実際，享保５年(1720)に18張あった荒野村の八手網の数は，元文４年(1739)には３張に減少している(第２表)。明治19年(1886)の漁業税の負担をみると，飯沼・新生・今宮村に記載がみられるのに対して，荒野村では記載がない(第４表)。近世における納屋場の土地利用については不明であるが，明治20年代の銅版画によれば，納屋場の地所をヤマサ・ヤマジュウ・ジガミサなど醤油醸造家(第４図)が所有し，短冊型の地割には倉庫が建てられ，河岸場には桟橋が設けられ高瀬船が着岸していた(写真２)。

b. 御穀宿

『銚子港沿革誌』によれば，幕末における銚子港の諸機構として御穀宿・気仙問屋(廻船問屋)・仲買(穀屋仲間)・船宿などが存在した。御穀宿とは，東北諸藩の廻米を取り扱うものをいい，諸藩から扶持を支給され，廻米の陸揚げ・蔵への出し入れ・江戸への回漕・濡米の売り払いなどを担当した。銚子で払米をする際には，銚子へ出張した藩の役人と協議して御穀宿から仲買に通知し，入札により売却した。幕末には御穀宿は，荒野村信太清左衛門・同権右衛門・鵜月庄蔵・大里庄次郎・寺井市郎兵衛と，今宮村宮内与惣左衛門の６軒あり，その多くは荒野村に集中していた。また幕府領の御城米は荒野村の大野喜惣太が取り扱っていた。幕末において荒野村に存在した各藩の蔵は，仙台藩２棟，米沢藩１棟，磐城平藩３棟，笠

間藩1棟であった。安政5年(1858)には，仙台藩・米沢藩・相馬中村藩は藩独自の蔵屋敷をもち，笠間藩・棚倉藩・平藩は御穀宿の蔵を借り上げて使用し，役人が毎年秋に銚子へ出張してきた。常陸国笠間藩の御穀宿があるのは陸奥国磐城郡・磐崎郡・田村郡に3万石の飛地があったためで，四倉・江之綱・小名浜の各港から廻米を行なっていた。他に出羽新庄藩も廻米の入津の際には役人が出張にきていた[49]。

幕末の東北諸藩と御穀宿との請負関係は第6表にうかがえる。仙台藩と信太家との関係は，前述した貞享2年(1685)「信太平兵衛雑録」に仙台廻米のことが記されていること，天保3年(1832)12月に仙台御穀船が常陸国波崎で破船した際の史料に，信太清左衛門・同権右衛門が「仙台家中」として記載があること[50]などから確認することができる。その在所は正確に示すことはできないものの，明治11年(1878)に海上郡役所が，明治22年

第4図　濱口儀兵衛商店所有の河岸場(明治26年)
国書刊行会編(1986)：『千葉県博覧図』，国書刊行会，131ページより引用。

写真2　旧仙台屋の倉庫
(銚子市中央町，1997年6月撮影)
今宮村の仙台屋市兵衛の倉庫であった。

第6表　幕末における東北諸藩と穀宿

藩　名	穀宿の人名
仙台藩	信太清左衛門，同権右衛門【荒野】
米沢藩	鵜月庄蔵【荒野】
磐城平藩	行方屋庄兵衛【荒野】
棚倉藩	行方屋庄兵衛【荒野】
常陸笠間藩	豊後屋(寺井)市郎兵衛【荒野】
相馬中村藩	宮内与惣左衛門【今宮】
幕府御城米	大野喜惣太【荒野】

「銚子領十七ヶ村記録」，「玄蕃日記」，「千葉県銚子港沿革誌」，現地調査により作成
注)【　】は村名を表す。

(1889)に銚子町役場が信太清左衛門方に設置されたとあり，その位置は下穀町に相当する(第2図)[51]。明治9年(1876)には，信太清左衛門，同権右衛門と同族であった通穀町の信田鉄之丞方に，銚子警察署が設置された[52]。実際下穀町付近に仙台藩の役所や蔵が存在したことが伝えられている[53]。

御穀宿は名主役を兼ねるなど荒野村のなかでも有力者であった。信太清左衛門，同権右衛門は近世に荒野村名主をつとめ，その名を元禄4年(1691)に確認することができる[54]。米沢藩の御穀宿であった鵜月庄蔵[55]は，十軒党鵜月八郎左衛門の分家にあたり，在所は通穀町であった。宮内与惣左衛門も今宮村の名主で，今宮三軒町の草分けの1軒であった。このように，荒野村の穀町には，仙台藩や米沢藩の蔵屋敷と御穀宿が存在していたとみられ，その役は，村の有力者が担っていたことが分かる。

c．気仙問屋

東北地方の廻米を除いた商荷物を扱う問屋は銚子では「気仙問屋」と呼ばれた。扱っていた品物は，主として鯡数子・鮭(松前産)，鰯搾粕・小アカ粕・生鮪・鰹節・骨粕・干鰯・魚油・昆布(仙台・南部産)であった。松前藩や水戸藩などの国産物も「御用荷物」と称してこの問屋が取り扱った。商荷物を積んだ廻船が入港すると問屋は仲買に通知し，入札または相対で値を定め，協議して商品を引き渡した。問屋・仲買と荷主との間で値段が調整されない時には，荷主は銚子で売却せず，河船で江戸へ輸送，もしくは敷金を出し蔵に保管しておき，相場をみて売却した。廻船は，下りには古着・砂糖・荒物などの日用品を江戸から買い求めた。安永期(1772～81)には問屋仲間が結成されており，毎年冥加金15両を納めていた[56]。安政5年(1858)には，新生村の豊後屋七郎右衛門，荒野村の江戸屋文治郎・越後屋治左衛門・広屋武左衛門・湯浅屋儀兵衛が気仙問屋として確認できる。

このなかで在所が確認できるのは新生村の豊後屋七郎右衛門である(第5図)。在所は荒野村と新生村の境界を流れる滑川の東岸であり，橋に接していたことから橋本とも称していた[57]。『下総国名勝図会』をみると滑川に小船が描かれており，物資の輸送のために，豊後屋は滑川を利用した可能性がある。豊後屋は寺井姓で，寛永12年(1635)に豊後国佐伯より移住し，佐伯氏とも称した[58]。元禄14年(1701)には南部・津軽から材木が入津した際，仲買をつとめた[59]。享保19年(1734)には利根川鳶島洲より屋敷地に稲荷社を勧請した。その稲荷には「盛岡領船手中」が寄進した狛犬と「仙台遠嶋船手中」が寄進した手水鉢があり，豊後屋と仙台・三陸との関係が窺える。

d．仲買

仲買，または穀屋仲間ともいう。東北諸藩からの廻米などの払下がある時に，穀物商人に命じ入札させて売り払ったことから，仲買仲間と呼ばれるようになった。東北地方から廻船が入港すると，気仙問屋または御穀宿からの通知で，入札により買い請けた。正徳年中(1711～16)高崎藩主間部越前守の時代に仲間が結成され，安永4年(1775)には冥加金として仲間から年15両を納めるようになり，株数を154株に定めた[60]。そのうち半数は荒野村が占めていた(第3表)。宝暦13年(1763)には「入船舶干鰯五十集之儀，近年符中土浦辺迄問屋直積致商売之障ニ相成候，因茲直積いたし候問屋江ハ縦粕五十集其外，何ニ致取引申間舗候事」[61]と，問屋(気仙問屋)が海産物を府中(石岡)や土浦まで直積することを禁じているが，仲間の一覧をみると，気仙問屋の名前が散見されることから，彼らが利根川，霞ケ浦方面の商人と直接取引をする場合があったといえる。

仲買の一つである浜名屋は，紀州出身の江戸商人浜名屋太右衛門が広屋儀兵衛所用の雑貨類の世話をする間に銚子地方に進出し，享保18年(1733)頃から太右衛門の身内の三十郎を銚子に留め，享保20年に五十集仲間の看板を受けて，店を構えたものである。在所は通明神町の広屋儀兵衛の屋敷の南向かいで，その東隣は行方屋庄次郎であった。広屋儀兵衛の大福帳に「新店」「前店」として収

支が記載されていることから，儀兵衛直営の形で経営されていたとみられる。元文２年(1737)には，浜名屋太右衛門の名義で煙草を中心に年間2,000両余の大商いがなされた。しかしながら，その後の経営は思わしくなかったらしく，広屋儀兵衛の合力により経営が継続されたものの，寛政12年(1800)に店を閉じ銚子を退去した[62]。仲買の仲間帳には，広屋儀兵衛・広屋庄右衛門・広屋十次郎といった醤油醸造家の名前がみられる。広屋儀兵衛は，18世紀前半には関宿・江戸へ向けた干鰯の取引，南部鉄山の経営，木綿・繰綿をはじめとする大坂からの下り荷の売買を行なっていたことからも[63]，浜名屋の事例は，銚子の商工業者が東北～江戸～上方を結んだ取引を指向していたことを示すものと考えられる。

以上のように，穀宿・気仙問屋は東北地方の廻船を相手に口銭を取り，仲買は利根川・霞ケ浦を経由して関東各地の商人を相手に口銭を取るなど，荒野村の商人は東北や関東の商人との取次を行なっていたといえる。

e．船宿

船宿は廻船の船頭や水主の宿であり，廻船はそれぞれ定宿を持っていた。安政～文久年間(1854～64)までは廻船の入港が多く，多いときは30艘，少ないときでも10艘を下らなかった。なかには数か月間停泊する廻船もあった。船宿が仲買を兼ねることは禁止されていた。天保年間には荒野村に30軒，今宮村に数軒，安政年間には25軒存在した。文化年間(1804～18)には仲間冥加金として年３両を領主に上納していた[64]。

浄国寺の資料によれば，明和４年(1767)10月８日に「奥州仙台門脇天吉新造破船溺死十三人，施主荒野綿屋伝八，旅人船頭松右衛門(略)，寺内ニ

第５図　明治20年(1887)における新生村の地割
(法務局所蔵地籍図及び現地調査より作成)

石塔建」とあり，仙台門脇の船が破船し13人が溺死した時，船宿である荒野下穀町綿屋伝八が施主をつとめ，浄国寺に墓石を建てた。つまり，廻船が銚子付近で破船した場合，その葬儀や墓石の建立などを船宿が行なっていた。実際，浄国寺・威徳寺にはこうした遭難者の墓が現在も残っている。他には宿として木屋新介(荒野明神町)・浦賀屋善五郎・浦賀屋伊助・網代儀助・鹿島屋佐次兵衛・常陸屋長八などがあった。浦賀屋善五郎は房州安房郡柏崎(現在館山市沼)の出身で，父を早く亡くしたため相州西浦賀の縁類に養子に行き，その後明和元年(1764)に銚子へ移住，荒野村気仙問屋江戸屋文治郎の世話のもと船宿を始めたという。浦賀屋善五郎と分家伊助は上方筋の廻船宿であった[65]。船宿の在所については，木屋新介が下明神町の北側，浦賀屋が万町の北側でいずれも納屋場に屋敷を構えていたことから[66]，河岸付近に立地していた可能性がある(第2図)。

f．醤油醸造家

前述したように，銚子領内の造醤油屋13軒のうち9軒が荒野村に集中していた(第5表)。広屋(濱口)儀兵衛は通明神町，その西隣は広屋(古田)庄右衛門(ジガミサ)で，濱口の後に入ってきたという。広屋庄右衛門の向かいには，広屋(岩崎)重治郎(ヤマジュウ)の店があった(第2図)。また，広屋儀兵衛の向かいには仲買の行方屋(大里)庄次郎，東隣には広屋武右衛門，北隣には呉服商有田屋七右衛門の店があり，これらは，濱口が来銚する以前から開業していた。こうしてみると，通明神町には近代以降成長する紀州移民の存在が目立っている。特にヤマサ・ジガミサ・ヤマジュウといった紀州広村出身の造醤油屋が通明神町に集中していたことは注目される。

4）御穀宿の経営

御穀宿の実態について明らかにするために，今宮村宮内与惣左衛門と相馬中村藩との関係を事例として検討する。

相馬藩は寛文8年(1668)から銚子港を通して廻米を始めたとされているが[67]，資料で確認できるのは，宝永年中(1704～11)に相馬藩主が御用金の用立を宮内与惣左衛門に託したが，宮内は取引をあやまり大損をしたという記事が最初である[68]。「玄蕃日記」の天保元年(1830)12月24日条に「今暁，今宮村与惣左衛門河岸南部様御米積置候小家出火，御米焼失」とあり，今宮村に「与惣左衛門河岸」と称する河岸があり，そこには米を保管する蔵が存在し，南部藩の廻米も預かっていたことが分かる。

相馬中村には「吉田屋覚日記」と題する幕末の商人の日記がある[69]。これは安政3年(1856)～明治11年(1878)にわたって，中村宇田川町の商人吉田屋鈴木庄右衛門の手代源兵衛が記したものである。鈴木家は当時中村藩の御用達商人で，藩の廻米や大豆・瀬戸物を江戸・銚子まで運送したり，江戸・銚子からは砂糖・琉玖・綿を仕入れていた。特に砂糖と琉玖については「御国産御趣意荷取扱」として独占販売権を有していた。また，松前・南部からは鯡・秋味といった海産物を仕入れ，領内だけでなく那珂湊・銚子・江戸へ輸送した。以下「吉田屋覚日記」を素材にしつつ，銚子と相馬との関係についてみていく。

吉田屋源兵衛は9艘の手船を所有し，船は御穀船・松前通・南部通の3系統に分けられていた(第7表)。このうち，相馬から銚子・江戸へ米を輸送していたのが御穀船であり，計4艘はいずれも1,000石に近い積載量を有していた。御穀船には1艘あたり米約3,000俵が積み込まれた。元治元年(1864)11月，中村の外港である原釜から出帆した御穀船の一徳丸には，新穀2,720俵のほかに，味噌や鰯・干鮑・鰹節・鰯粕・昆布などの海産物が積みこまれた(第8表)。海産物は松前・南部地

第7表　吉田屋源兵衛所有の廻船
－元治元年(1864)

船　種	船　名　　(積載量)
御穀船	己百丸，己千丸，亀友丸，一徳丸(960石)
松前通	乾々丸，永居丸，円通丸(500石)
南部通	万来丸(180石)，順昇丸(270石)

「吉田屋覚日記」より作成

方から仕入れたもので，御穀船には米以外の商品も積まれていた。慶応元年(1865)11月には，原釜から出帆した御穀船亀友丸に積まれた米2,900俵が濡米となったため，銚子の御穀問屋宮内与惣左衛門のところで売却している。文久2年(1862)そして翌3年には，己百丸が小浜・蛯浜より前年，前々年の米(買米・物成米)を3,000俵積み入れている。これは江戸・銚子などの相場をみて，米が輸送されていることを示している。一方，松前通・南部通の船は，松前・南部地方の海産物を仕入れる船であり，元治元年(1864)10月には盛岡釜石を出帆した順昇丸は原釜に立ち寄った後，江戸へ出帆した。積載物は海産物で，その宛先は銚子の相馬屋吉十郎・浦賀の気仙屋長七・江戸新川の丸屋清七であった。

下り荷は，江戸・銚子・浦賀で購入した砂糖・琉玖・綿・塩が主たる商品であった。文久2年(1862)10月には，御穀船己百丸・亀友丸が銚子か

第8表　吉田屋源兵衛の交易活動

年号(西暦)月.日	記　　事
文久2(1862)10.18	己百丸，原釜に到着，荷物は御趣意荷69駄・商荷73駄，外に中郷鉄山御用の鉄砂364俵積下る
文久2(1862)10.21	亀友丸，原釜に到着，荷物は江戸より商荷154駄，銚子より商荷27駄あり，他に銚子より鉄砂216俵を積下る
文久2(1862)10.22	己百丸，小浜より前年の御買米3,000俵積入
文久3(1863)2.3	円通丸，御勘定帳調う，中湊にて2,678両736文秋味を売る
文久3(1863)4.1	己百丸に積まれた下り荷の御趣意荷・並荷400駄と御屋敷荷170駄の荷役あり
文久3(1863)4.2	円通丸に荷物の積入，米500俵(内御物成138俵・買米362俵)・富沢砥石192俵・大堀瀬戸294俵・裏筵52箇・煙草1箇・鍬16具・竹箒165本(下り荷)
文久3(1863)4.4	己百丸，北郷蛯浜より前々年の御物成米2,800俵積入，原釜よりは味噌250樽を積入
文久3(1863)11.1	己百丸，原釜へ到着，御趣意荷物は黒200丁・白50樽，外に丁子与八殿より白10樽，並荷135駄
元治元(1864)4.15	一徳丸，原釜へ到着，荷物は377駄，うち庄右衛門分は黒50樽・大嶋50丁・白飛25樽・天光20樽・初雪30樽・三州綿15本
元治元(1864)7.14	亀友丸，去る7.4に江戸を出帆後，今日原釜へ到着
元治元(1864)10.1	順昇丸，盛岡釜石浜より原釜へ到着，中湊騒動につき江戸へ出帆荷物は鰯粕56俵・頭粕38俵・箱22箱・節俵240俵・田作り68俵・片前福来15俵・樽18樽・昆布253俵・干鰯83俵，銚子相馬屋・浦賀気仙屋・江戸新川丸屋宛
元治元(1864)11.12	一徳丸，原釜より出帆，荷物は新穀2,720俵・味噌50樽・片前373俵・鰯24箇・鮪□身29樽・干鮑1箇・鰹節18箇・鰯粕6俵・鮪骨粕7俵・猪花3箇・昆布25俵・鮭塩引1俵・下駄甲駄42困
慶応元(1865)6.4	亀友丸，原釜に到着，御趣意69駄，並荷212駄
慶応元(1865)11.26	去る10.29亀友丸，原釜より米2,900俵，家来の下駄羽85箇を積入出帆，銚子付近で船底に水がたまったため，銚子御穀問屋宮内与惣左衛門にて積荷を売却，船を修理し銚子を出帆，今夕小浜到着
慶応2(1866)3.15	亀友丸，浦賀より到着，荷物は斎田塩3,600俵
慶応2(1866)6.20	己百丸，原釜を出帆，荷物は岩鉏100俵・槻木下駄歯80足入129箇・大豆372俵・小豆62俵・樅平割1,753束・桐甲良30箇・同23困
慶応2(1866)9.15	亀友丸，原釜に到着，斎田塩5,710俵(951石)を相州浦賀より積み下る

「吉田屋覚日記」より作成

ら原釜へ砂糖と鉄砂を運送している。銚子において荷積みの世話を行なったのは御穀宿宮内与惣左衛門であった。亀友丸には商荷(砂糖・琉玖)が181駄積み込まれ，そのうち27駄は銚子から，154駄は江戸から川船で銚子まで運送された。銚子で荷積みされた商荷のなかには，黒砂糖「薩州極上物稀雪印三樽」といった高級品まで含まれていた。その他鉄砂200俵も宮内与惣左衛門のもとから積み込まれた。また，亀友丸は慶応2年(1866)には相模浦賀から斎田塩を3,600俵，5,710俵を積み込んでいる。つまり，幕末における相馬と江戸との輸送路は,江戸直送と銚子経由の2通り存在していた。

このように，御穀宿は相馬藩の御穀船に対して下り荷も提供していた。砂糖・琉玖が江戸と銚子の両方で積み込まれたのは，当時これらの商品に関して相馬藩では吉田屋が専売権を有していたことから，相馬の商人が各々江戸・銚子の商人と取引があったためとみるよりも，商品の種類や相場の違いに応じて購入したためと考えられる。したがって，江戸と銚子の相場に応じて，ルートや積載物・積載量が決定されたと考えられる。さらに，銚子では薩摩産の砂糖・三河木綿・鉄砂といった他国産の特産物も多く取引されていたことが指摘できる。

5）気仙問屋の経営

岩手県気仙郡三陸町綾里の千田家文書に安永～文政期(1772～1830)の銚子問屋との魚肥の取引資料がみられる[70]。千田家は綾里村の中世的土豪の系譜を引く草分け百姓であったが，宝暦・天明期(1751～89)に気仙地方の赤魚粕・鮪粕・鰯粕などの魚粕を中心とする海産物の生産が進展をみせると，これらの集荷を開始し，安永期(1772～81)には資本を蓄積し，船を購入して，廻船問屋として気仙地方と関東地方との取引に関わるようになった。千田家と銚子との関係が生まれたのは安永期のことであった。千田家文書にみられる銚子問屋は広屋武左衛門・豊後屋七郎右衛門・江戸屋文治郎・越後屋次左衛門で，いずれも気仙問屋であった。

越後屋次左衛門書状(年不詳)によれば「一円漁事無御座候而困リ入申候，此末御地筋大漁事御吉事奉待居候」や「当年は五十集類之物不足故，此末々相応之取引可仕と奉存候，〆粕も一程不漁故，来春見事之直段相出可申哉」とあり，当時銚子周辺が不漁であったため，三陸の海産物が銚子にとって大変重要であったことが読み取れる。実際銚子では宝暦5年(1755)ごろから不漁となり，明和5年(1768)には大不漁を経験し，寛政年間(1789～1801)に漁獲がようやく回復した[71]。つまり，銚子と三陸地方が18世紀末期には海産物において相互補完の関係であった[72]。近世末期の「魚粕並干鰯直段付」[73]と題する史料には，銚子の海産物商であった宮本屋太左衛門・行方屋庄次郎，醤油醸造家であった柳屋仁平次・田中玄蕃が連名し，銚子における魚油・〆粕・干鰯の値段と運送費の見積りが記されている。田中玄蕃は元禄8年(1695)に飯沼村の伊勢地浦を開発し干鰯場を設けている[74]。明治24年(1891)の『水産事項特別調査』によれば，銚子では漁業資本の貸主は地元の水産肥料商であった[75]。つまり，銚子の干鰯・〆粕生産は，地元資本で経営されていたと考えられる。したがって，銚子で不漁が続いていた18世紀末期に，資本を有する銚子の商人にとって，三陸地方からもたらされる海産物がこの上ない存在であったことは言うまでもない。

次に注目されるのは，銚子で集荷された海産物は，銚子近在で使用されたり，江戸深川の銚子場に運送されるだけでなく，関宿・境を通じて利根川流域に供給されていた点である。銚子問屋からの書状によれば「鰯粕ハ近在不向，堺・関宿向キ口ニ御座候所，右之場所水損，彼是不景気ニ御座候」(広屋武左衛門書状)，「其地南部共鰯漁事御座候由大慶奉存候，何卒打続大漁事願申候事御座候」(豊後屋七郎右衛門書状)とある。銚子近在では〆粕・鰯粕が苗代で使用されたが，境・関宿方面では赤魚粕が向いており，需要が増していたらしく，仙台・南部での大漁を祈願している。しかし，境・関宿でも近年水害に見舞われたためよく売れなかった。この史料は，銚子での相場を千田

家に知らせる一方で，銚子が関東農村の肥料の需要に応える場所であったことを示している。すなわち，東北と江戸・関東農村との中継地にあたる銚子は，利根川や霞ケ浦の水運を利用した広い後背地をもち，それらに向けて商品の差配を行なう物資の集散地であったといえよう。

先述した近世末期の「魚粕並干鰯直段付」には，干鰯・〆粕の供給先が種類別に記載されている(第9表)。取引先は遠江・三河・尾張・紀伊・和泉・阿波にまで及んでいた。遠隔地へ運ばれる魚肥は，川船で江戸まで運送され，江戸問屋を通じて主に大坂商人に売られていた[76]。嘉永5年(1852)の江戸干鰯問屋の喜多村富之助が記した「粕干粕商売心得書」には[77]，銚子の飯貝根・荒野・今宮には商人が多く，江戸から魚肥の仕入を受けず，独自に関宿へ供給していたことが記されている。つまり，海産物流通においては，江戸を中心とした構造だけでなく，銚子がその集荷地・出荷地として独自の機能を有していたことが指摘できる。

第9表　近世末期における銚子からの干鰯・〆粕の供給先

干鰯・〆粕の種類		供給先
銚子干鰯・〆粕	春　引	植田の肥として諸国に捌く
		遠州・三州・勢州・泉州・野州の田地に適す
	夏　引	上州筋の土地に適す
		その他江戸近在並に尾州菜園地，国々綿地
	秋　引	尾州大根，其外国々麦の追肥
	冬　引	紀州蜜柑の肥料，其外国々麦の追肥
		諸国田地に捌く(11月漁干鰯)
	寒　引	阿州藍の肥料，其他諸国田地に捌く
奥州魚粕	南部(鰯)	野州麻綿肥料，其外諸国へ捌く
	南部赤魚〆粕	尾州・三州其他関東筋諸方田肥に捌く
	仙台(鰯)	南部に同じ
	仙台赤魚〆粕	南部に同じ

田中義家文書，年不詳「魚粕並干鰯直段付」より作成

Ⅳ　近代における港の変容

1）明治期における興野

a．港湾統計からみた港の変化

明治期には，銚子港はどのような変化を遂げたのだろうか。まず，港湾統計を素材として検討することとする。明治13(1880)～16年の統計では，銚子港(興野)と飯沼河岸とに分けて，船の出入数及び輸出入品目とその金額が記載されている(第10表)。まず目につくのは，近世に入津していた米がみられなくなることである。先述したように，近世に東北諸藩の廻米を取り扱った御穀宿は，興野地区に集中していた。一方飯沼河岸に入る米は，鹿島・干潟・佐原等の銚子周辺地域からであった。したがって，興野における米の取扱量の減少は，東北地方からの米が銚子に入津しなくなったためとみて間違いないと思われる。東北地方の米が入津しなくなったのは，幕藩体制が消滅したためというより，むしろ東北と東京とを結ぶ流通体系が変化したためと考える。実際，銚子港に入る米は19世紀以降は減少していた[78]。東北地方における流通の拠点であった石巻では，明治3年(1870)に三陸地方の物品を東京へ輸送することを目的とし，特に貢米廻漕請負義務を有した石巻会

第10表　銚子港・飯沼河岸における船の出入数及び輸出入品(明治13～16年)

		出船		入船		輸出		輸入	
		西洋	日本	西洋	日本	主要品	金額	主要品	金額
明治13	銚子港	－	360	－	303	醤油・絞粕	232,630	麦・大豆	66,557
	飯沼河岸	－	517	－	789	－	192,893	－	169,780
明治14	銚子港	－	32	－	32	醤油・粕類	308,545	麦・大豆	76,417
	飯沼河岸	－	684	－	636	干鰯	184,952	米	229,992
明治16	銚子港	70	317	72	127	醤油	158,088	大豆	45,778

『日本帝国統計年鑑』より作成

社が設立されたように[79]，東京直送への指向が強まっていった。さらに明治11年(1878)に政府が東北地方振興の一環として野蒜築港を計画すると，三菱汽船が石巻に支社を設置，明治14年(1881)の第一期工事竣工の際に野蒜へ支社を移転し，南部・仙台の米穀などを東京へ運送した。その結果，野蒜での荷為替の取組高は横浜・函館・神戸に次いだ[80]。つまり，海運は汽船の時代に入り，銚子を経由する必然性が薄れていったといえる。

その一方で，銚子で生産された絞粕・干鰯などの肥料や醤油は銚子港(興野)と飯沼河岸から輸出されている(第10表)。これらは近世と同様に利根川水運を利用して，東京をはじめ関東地方各地に輸送されていた。明治14年(1881) 2月には，濱口儀兵衛を中心に銚子汽船株式会社が創立され，汽船による銚子～東京間の物資の輸送が可能となった[81]。輸入品目にある麦・大豆はいずれも醤油の原料であった。明治13年(1880)における銚子港(興野)と飯沼河岸を合わせた輸出入金額は660,060円にのぼり，境河岸には及ばないものの，宮城県の寒風沢港に並ぶほどの，東日本でも有数の港であった[82]。

次に，明治39年(1906)の銚子港の統計を検討する(第11表)。輸出品に醤油がみられないのは，明治30年(1897) 6月に総武鉄道の佐倉～銚子間が開通したためと考えられる。海上郡は千葉県でも有数の甘藷の産地で，それから澱粉が作られた。主として絹織物の機糊・菓子類・蒲鉾・歯磨等に使用されていた[83]。一方，東北地方からの輸入品目としては杉角材・杉板・薪炭などがみられた。木材は醤油用の樽，もしくは漁船・川船の造船に用いられたと考えられる。木炭は燃料用，特に魚油を製造するために使用され，大正期まで石巻から運送されたという[84]。数値としては少ないが，東北地方との取引は，近世の米・海産物の取引を

第11表　銚子港における主要輸出入品(明治39年)

品物		数量	価格(円)	仕向地・仕出地
輸出	鰮搾粕	152,574貫	65,623	東京
	甘藷	1,267,043貫	50,472	石巻・小名浜
	生魚	32,560貫	27,644	東京
	魚網	5,850貫	13,650	東京
	油粕	62,822貫	12,329	東京
	荒粕	27,644貫	11,066	東京
輸入	大豆	13,979石	139,760	常陸・東京
	絹綿交織物	75,703反	113,638	東京
	小麦	9,643石	104,557	常陸・東京
	杉角材	17,381本	52,142	宮古・石巻
	薬品	50,000封度	50,000	東京
	清酒	776石	36,280	東京
	絹織物	8,504反	35,774	東京
	過燐酸	70,055貫	21,001	東京
	紡績糸	7,100貫	18,460	東京
	玄米	1,112石	16,680	常陸・東京
	豆粕	68,479貫	14,380	東京
	杉板	24,145坪	13,972	宮古・石巻
	麻	4,500貫	12,600	東京
	西洋紙	25,460封度	12,387	東京
	菜種	5,100貫	10,250	常陸

『大日本帝国港湾統計』より作成
注)価格が10,000円以上のものを対象とした。

背景としたものであったと考えられる。

また，輸入品目には醤油の原料である大豆・小麦が引き続きみられる。原料の主産地である茨城県南西部からの輸送は，鉄道より従来の利根川・霞ケ浦の水運を利用した方が便利であったためである。栃木県から輸入されていた麻を原料に，女性の副業として漁網が生産され，東京・金沢・三陸・北海道方面に輸出された[85]。麻生産が行なわれていた栃木県の畑作地帯へは，銚子産の魚粕が輸出されていた。菜種は肥料用であるとみられる。日清戦争以後，満州産の豆粕の導入に伴い植物質肥料が増加した。実際，肥料商大里庄治郎家でも明治末期から菜種の販売や，油粕の製造・販売を行なっていた[86]。明治39年(1906)の銚子港の輸出入金額は1,159,059円，全国157位で[87]，商港としての性格はすでに薄れ，銚子で展開する産業にかかわる品物が取引されるにとどまっていたといえる。

b. 明治期における商家構成

明治期における商業の性格について検討するために，明治31年(1898)の『日本全国商工人名録』所収の銚子町(新生・興野・今宮)の商工人名一覧[88]を素材とする(第12表)。この資料は全ての商家を対象としていないものの，当時の銚子の大店が記載されていることから銚子の商業の一端をみることができる。

明治中期には，近世に存在した御穀宿・気仙問屋・仲買・船宿といった商港機能に関係する商業はすでに消滅していた。こうした商人は転出したり，業種を転換している。御穀宿の一人鵜月庄蔵は，興野の通穀町で茶商を営んでいた。扱っていた商品は茶・和洋紙・砂糖・畳表・澱粉・澱粉粕・筵などであった。なかでも澱粉・筵は銚子周辺の農家の副業として生産されたもので，筵の材料である藁は，肥料俵や醤油の樽用としても需要があった[89]。御穀宿であった大里庄治郎も明治30年には肥料商として登場し，砂糖・荒物も商っていた。取り扱っていた肥料は銚子産の〆粕であった。仲買であった保立清助(酒屋)は鰹節問屋兼肥料商となっている。紀州移民で，網元・廻船業などを営んでいた竹内五大夫は，利根川沿いの字納屋場において，櫓木・腕木・船材を扱う材木商及び造船業(和船)を営んでいた[90]。

気仙問屋であった新生の豊後屋七郎右衛門は，幕末には銚子を去り，その跡地に田中太平が入った。田中太平は醤油醸造家であったらしく，醤油蔵を6棟所有していた。慶応2年(1866)には高崎藩の御用達商人をつとめた[91]。明治6年(1873)に，豊後屋の勧請した稲荷社が田中太平により再興されたことが棟札に記されている。しかし明治28年(1895)には転出し，次に山本与平が入った。山本与平は屋号を山田屋といい，明治31年には肥料問屋を営み，大正の始めに醤油醸造業を開始した[92]。昭和15年(1940)には，同地所で山本与平商店(醤油・味噌醸造・海産物肥料魚油問屋)と，銚子水産工業株式会社(フィシュミール製造・各種水産物加工)が展開し，醸造業・海産物問屋・水産加工を経営していた。

第12表から，呉服太物商が多いことも指摘できる。呉服商の一人深井吉兵衛は近江日野出身で，元禄期に今宮目出度町で質屋を開業，その後古着屋・醤油醸造業も始めた。明治26年(1893)には醤油醸造業及び呉服の買継商を営んでおり，東京呉服木綿組合の一員となっていた。先に相馬と銚子

第12表　銚子町の主要商工業者数(明治31年)

業　種	数
醤油醸造	5
呉服太物商	10
穀物商	4
肥料問屋	10
肥料商	9
煙草商	2
茶商	2
薬種商	2
金物商	2
荒物商	3
網商	4
鰹節問屋	3
材木商	3
旅人商	2

『日本全国商工人名録』より作成

との関係で触れたように，古着・呉服は，東北地方に向けられた下り物の一つであったとみられる。しかし明治以後は深井家の経営は醤油醸造業に比重を移し，大正３年(1914)には，田中玄蕃・濱口吉兵衛とともに銚子醤油合資会社を創設するに至った。

このように，明治中期における銚子の商工業者の特徴をみると，醤油醸造業者のほかに，肥料問屋・肥料商・網商・鰹節問屋といった水産関連の業種が目立つ。つまり，商工人名からみても，銚子が物資の中継地の機能から醤油醸造と漁業・水産加工などの産業が展開する都市へと変化していることが分かる。

c．御穀宿の経営の変化－大里家を事例として

近世における荒野の有力商家が，近代を通じてどのような変遷を遂げていたのか。ここでは，大里庄治郎家(行方屋)と保立家(酒屋)を取り上げ，その経営の変遷や特徴を押さえ，近代の興野地区ひいては銚子の港町としての機能を検討する。

前述のように，近世において大里家は御穀宿をつとめていた。明治期に入り経営を転換したのが，第９代大里庄治郎憲文の時期であった(第13表)。明治29年(1896)にまとめられた『九代大里憲文之履歴』[92]には「元来大里家ハ世々三陸諸藩ノ廻米ヲ扱ヒ，旧高崎藩ノ御用達ヲナシ，水産肥料商ヲ業トセシガ，維新ノ変革ニ際シ，旧藩ト共ニ其風潮ヲ受ク」とあり，その当時の大里家の生業は「聊ニ麻草履ヲ以テ業」とするものであった。９代は「養父代ノ負債ヲ一切消却スルコトヲ先務トシ」，明治８年(1875)に肥料営業を再興した。明治20年代には「先代失フ処ノ地所ヲ再取戻シ」，大里庄治

第13表　第９代大里庄治郎憲文の略歴

年　代	事　　項
安政元年(1854)	常陸国鹿島郡東下村荒波農業藤城助右衛門二男として生まれる
－	海上郡高田村の宮城喜三郎のもとで肥料米穀の実業につく(13歳)
明治７年(1874)	興野村の大里庄治郎氏の養子となる(21歳)
明治８年(1875)	肥料営業を再興する
明治14年(1881)	９代大里家を相続する
	興野村村会議員に選出される
明治18年(1885)	総武鉄道の敷設を嘆願する
明治19年(1886)	興野村地主総代に選出される
	銚子汽船会社常議員となる
明治22年(1889)	銚子町町会議員に選出される
	関宿に肥料会社を設立し，関宿肥料会社社長となる
明治20～28年	家屋その他土蔵建物を新築する
明治29年(1896)	県会議員に当選する
明治31年(1898)	総武鉄道開通に伴い銚子運送店を設立する
明治33年(1900)	風帆船を購入し，運送業を起こし，三陸・北海道へ交通を開き，肥料・砂糖・荒物・海陸運送・五十集の５種の業をなす
明治38年(1905)	新たに機関を布設して製油業を開始する
明治40年(1907)	県会議員に当選，銚子中学校を県立に復帰することに尽力する
明治41年(1908)	銚子港川口築港問題のため大いに尽力する
明治42年(1909)	㊐銚子運送店を合資会社に改組する
	永眠(56歳)

『大里家過去帳』，『九代大里憲文之履歴』より作成

郎商店の家屋・土蔵などを全て新築した。明治26年(1893)の銅版画には，9代が新築した大里庄治郎商店の敷地の様相が窺える(第6図)。道に面して店舗が構えられ，敷地内には砂糖・小麦粉倉庫や肥料製造の作業蔵などが存在していた。

明治22年(1889)には関宿に肥料会社を設立し，関宿肥料会社社長に就任した(第13表)。これは関宿向河岸(現在埼玉県幸手市)の肥料問屋，喜多村藤蔵の経営を引き継ぐかたちであった。喜多村は近江商人で，近世には海の帆船11艘，川の伝馬船500艘を所有し，江戸深川の永代町は全て喜多村の所有地であったほどの豪商であった[93]。関宿は，銚子からもたらされる干鰯や〆粕を関東地方の農村に供給する地点であった。大里家は銚子・飯岡の網元らと協力して関宿肥料会社を設立したが，その運営は思わしくなく，結局明治32年(1899)には東京深川に移転した[94]。しかしながら，9代大里庄治郎が関宿肥料会社社長に就任したことは，大里家が関宿と近世以来の密接な関係を背景にした動きであったとみることができる。明治28年(1895)に京都で開催された第4回内国勧業博覧会における銚子の受賞品目をみると，「醤油」とともに「鰯搾粕」の受賞が多く，当時銚子で大量かつ良質の〆粕が製造されていたことが分かる(第14表)。受賞者の中には大里庄治郎の名が見え，9代が鰯搾粕販売に尽力していたことが判断

第14表　第4回内国勧業博覧会における銚子町・本銚子町の受賞者と出品品目(明治28年)

受賞	品目	受賞者	
有功一等賞	醤油	銚子町	濱口儀兵衛
有功一等賞	醤油	本銚子町	田中玄蕃
有功一等賞	鰯搾粕	銚子町	岡田源吉
有功二等賞	醤油	銚子町	深井吉兵衛
有功二等賞	鰯搾粕	銚子町	岡本庫太郎
有功三等賞	醤油	銚子町	田中常右衛門
有功三等賞	鰯搾粕	銚子町	浅川藤吉
有功三等賞	鰯搾粕	銚子町	保立清助
有功三等賞	鰹節	本銚子町	斎藤弥太郎[1]
有功三等賞	鰹節	銚子町	保立清助
褒状	鰯搾粕	本銚子町	斎藤弥太郎
褒状	鰯搾粕	本銚子町	時友太助
褒状	鰯搾粕	本銚子町	多田傳助
褒状	鰯搾粕	銚子町	大里庄治郎
褒状	鰹節・乾蛤	本銚子町	斎藤弥太郎
褒状	網地	銚子町	北村治兵衛
褒状	沃度	本銚子町	武内儀三郎
褒状	銚子縮	銚子町	白井幸吉
褒状	銚子縮	銚子町	白石嘉平
褒状	銚子縮	本銚子町	林茂三郎
褒状	養老縮半袖下着	銚子町	加瀬宇平治

「第4回内国勧業博覧会受賞人名録」より作成。
(『明治前期産業発達史資料』勧業博覧会資料107・108・109・110所収)
注：1)銚子鰹節改良組合頭取

第6図　明治26年(1893)における大里庄治郎商店
国書刊行会編(1986)：『千葉県博覧図』，国書刊行会，137ページより引用。

できる。大正期の大里庄治郎商店の封筒には営業品目として「諸油肥料・砂糖・製粉・雑貨」とある。一方で，昭和初期の封筒からは製糖・製粉・ビール・製油会社及び生命保険会社など，東京の大手会社とのつながりを持っていたことが窺え，昭和初期には特約店や代理店として砂糖・小麦粉・諸油などを取り扱っていた。大正期における所得金のうち，大里庄治郎商店の分は約33％を占めていた(第15表)。

大里家の経営のもう一つの特徴は運送業であった。9代は明治31年(1898)に総武鉄道が開通すると同時に銚子運送店を設立し，明治33年(1900)には風帆船を購入し，三陸や北海道への交通を開き，水上・陸上の両運送を開始した。運搬される荷の中心は〆粕であった。明治33年に銚子運送店は，銚子～新生間の貨物線開通と同時に新生駅前に出店し，ここを〆粕輸送の拠点とした(写真3)。陸上運送については大正年間に馬車中心の運送から貨物自動車を導入し，鉄道省公認運送店として認定を受けるに至った[95]。昭和2年(1927)には「銚子合同運送株式会社」と改称され，総武線は干潟以東，成田線は笹川以東の沿線上に支店を構え，他の運送業者をその傘下に組み込んでいった。

陸上輸送と同時に，銚子通運株式会社和船部を設置するなど，水上運送も拡充させていった。昭和10年(1935)，11代大里庄治郎の代には銚子の回漕店の一つ「辰忠回漕店」を買収し，工費2万円余をかけて新造船を完成させた[96]。昭和7年(1932)

写真3　新生駅における〆粕の運搬(昭和初期)
(大里庄治郎氏提供)
銚子合同運送に依頼した〆粕の荷主らを写したものである。

第15表　大正7年(1918)における大里庄治郎家の所得

所得の種類	場　所	員　数	所得金額	名義
貸宅地	銚子町イ(新生)	826坪	99円10銭	庄治郎
貸宅地	銚子町ロ(興野)	737坪	88円40銭	庄治郎
貸宅地	銚子町ハ(今宮)	167坪	16円70銭	庄治郎
貸宅地	本銚子町字東町・浜町	395坪	47円40銭	庄治郎
貸宅地	本銚子町字東浜	620坪	31円	庄治郎
田貸付	鹿島郡東下村舎利	1町5反9畝21歩	なし(凶作)	庄治郎
畑貸付	鹿島郡東下村舎利	9反9畝9歩	31円40銭	庄治郎
非営業貸金利子	—[1]	5,500円	405円	庄治郎
菜種販売	銚子町ロ	1,625叺	81円(口銭)	庄治郎
製油業	銚子町ロ	4,000円	200円	庄治郎
砂糖・麦粉販売	銚子町ロ	(卸12,500円 小売1,000円)	140円	庄治郎
貸宅地	銚子町ロ	1,317坪	150円	さと[2]
		総所得金額	1,290円	

大里家文書「大正7年第3種所得金額申告写」より作成
注：1)非営業貸金利子：本銚子町青野慎助，銚子町高階宗三郎
2)10代庄治郎の母
3)大正期の大里庄治郎商店の営業品目：諸油肥料・砂糖・製粉・雑貨

の「荷物判取帳」[97]には，椎柴村野尻の船主，一原長兵衛が引き受けた船荷の種類・積載量などが記載されており，銚子通運和船部からも出帆の依頼を受けている。東京方面へは一斗缶入りの「ヤマサ醤油通函」等を運送しており，東京から銚子へは，ヤマサ・ヒゲタの醤油の空瓶や，醤油工場の燃料源として石炭・コークス，樽用の木材等が運び込まれた。銚子通運は，東京日本橋の蛎殻町に荷扱所をもち，東京へ運び込まれた荷物の決算など，船荷運送管理を合わせて行なっていた。しかしながら，昭和に入ってから徐々に鉄道輸送に押され，東京～銚子間の水上運送は消滅していった。

明治初期，9代大里庄治郎により肥料商・肥料の輸送を主として大里家の再出発がはかられたが，銚子からの輸送は東京のみに向けられていたわけではなく，特に肥料については関宿を経由して関東の農村地帯に向けられていたことが指摘できる。煙草や荒物雑貨商を営んでいた興野東芝の塚原清吉商店(常盤屋)には，関東一円から同業者の子弟が見習いにきていた[98]が，こうした事例も銚子を起点あるいは中継地とした物資輸送の流れを示すものである。また，大里家が海上輸送を通じて再び東北地方への経営展開に着眼したのも，近世に御穀宿として東北地方と取引していたことを背景としていたと考えられる。

d. 仲買の経営の変化－保立家を事例として

つぎに仲買商であった保立家の業種の変化を見てみよう。「内済議定証文之事」(年不詳)には，「…，先年拙者父酒屋儀八事，其地にて入船荷物仲買渡世仕候て相応に致繁昌候処」とあり[99]，近世には荒野村富田屋町で仲買を営んでいた。明治期に入ると，大里家より借地し，居所を通穀町に移した。第14表にみられるように，保立清助も内国勧業博覧会において鰹節や鰯搾粕で入賞した。さらに明治35年(1902)には，ロシアのサンクトペテルブルクで開催された万国漁業博覧会で，千葉県からは技術改良を推進した千葉県水産試験場とともに，保立清助も鰹節で銅メダルを受賞した[100]。つまり，明治期に保立家は鰹節問屋・肥料商となり，良質の鰹節や鰯搾粕を製造していたことが窺える。鰹節製造には高度な技術を要した。銚子における鰹節製造は夏季の漁の際に，「原料一時に堆積するを以て，その製法粗雑に流れやすく，これが改良上すこぶる困難の事情ありしが，数年来製造講習会を開き(中略)改良に尽くしたる結果，すこぶる良品を出すに至った」ようである[101]。千葉県水産試験場が明治32年(1899)に千葉県勝浦に設置され，それと共に銚子には鰹節製造技能の修得を目的とする練習部が設置されたことが，技術改良の一要因となった。

最後に，肥料商を営む大里家や保立家といった興野地区の商家と，実際にその原料となる鰯を捕る漁師との関係を指摘したい。明治12年(1879)に，飯沼村の漁師鶴岡利七は，保立清助に金35円を借用した際，抵当を大鰯網半張とした[102]。また，明治末期～大正期に大里庄治郎は飯貝根の東浜町などに500～700坪の土地を所有し，貸地としていた(第15表)。銚子には「荒野の旦那，飯貝根の衆」という言葉があり，荒野には間口の広い大店が多いのに対して，飯貝根には間口の狭い漁師の家屋が連なることを直接的には言い表している。しかし，実際にはそうした景観のみならず，飯貝根の漁師及び水産加工業者に対して，資金を提供するのが荒野の商人であるといった，荒野と飯貝根との人的関係の意味合いも含むものと考えられる。

2）大正～昭和初期における興野

a. 大正期における興野の景観

大正2年(1913)「下総国銚子全図」[103]により当時の興野地区の景観を推定することができる(第7図)。明治期と異なる点は，明治30年の総武線開通に伴い，銚子駅前の東芝・西芝にまで集落が拡大したことが挙げられる。駅前には銚子運送店をなどの運送業が展開した。下穀町にあった海上郡役所は東芝に移転し，登記所・税務署などが西芝に新設されたように，行政機関も駅前周辺に集中した。集落の南限に位置していた威徳寺は明治22年(1889)に焼失したため，明治44年(1911)に

第７図　大正２年(1913)における興野地区の景観
(『下総国銚子全図』に加筆した)

駅の南側に移転した。興野地区の草分けであった十軒党の構成員は，駅開設に伴い，旅館業などに転業したものや，農業のほかに新たに澱粉製造を始めるため，敷地を求めて駅の南へ移転するものがあるなど，変容をせまられた。

さらに，醤油醸造工場の新築や工場の買収がこの時期にみられた。ヤマサは明治26年(1893)に西隣で同様に醤油醸造業を経営していた紀州出身の古田庄右衛門(ジガミサ)を買収し，その蔵を譲り受け，本蔵(乾蔵)に付属させた。明治39年(1906)には，今宮地区にあった田中玄蕃の別家田中常右衛門の醤油蔵を濱口吉兵衛が買収し，ヤマサが所有していたジガミサの商標権を購入した[104]。大正３年(1914)に深井吉兵衛・田中玄蕃とともに銚子醤油合資会社(現在ヒゲタ醤油)を設立させると，旧田中常右衛門の蔵をヒゲタ第２工場とした[105]。大正７年(1918)には，古田庄右衛門の向かいにあった紀州出身の岩崎重次郎(ヤマジュウ)がヤマサに買収され，ヤマジュウの蔵の一部がヤマサ第１工場に組み込まれた。

醤油工場の拡大については，まず明治34年(1901)にヤマサが新生地区に巽蔵を建設し，それを第２工場としたのが契機であった。大正７年(1918)には巽蔵の西隣の字砂良神を買収して，６棟の仕込蔵を建設した。大正13年(1924)には，本店及び研究所をヤマサの発祥地である興野の通明神町から新生に移転させた。さらに昭和元年(1926)に第２工場の南の小川戸地区に第３工場を

新設した[106]。このように，ヤマサ・ヒゲタを中心に醤油醸造業の再編がみられ，集落南部の田畑が工場用地と変わっていった。

b. 缶詰工場の展開

大正期に入り，銚子において発展を遂げた工業として缶詰製造業がある。日本での缶詰製造の開始は，明治4年(1871)の長崎県での鰯油漬缶詰の製造であった。銚子では，明治11年(1878)にパリで開催された万国大博覧会を契機として，内務省勧農局の事務官がフランス製の製缶機械を送り，銚子町の宮内某が鰯油漬缶詰を製造したことにはじまる[107]。

その後，銚子において缶詰製造が定着する契機となったのが，明治39～42年(1906～09)における銚子近海での鯨漁であった。この時期，銚子近海に鯨の大群が来遊し，東洋漁業株式会社・大日本捕鯨株式会社・太平洋漁業株式会社が利根川河口に拠点を構え，捕鯨競争を開始した。明治40年度に銚子で捕獲された鯨数は大日本捕鯨が68頭，東洋漁業が53頭，太平洋漁業が36頭であり，本銚子町の千人塚付近にこれらの会社が展開していた[108]。この捕鯨に伴って鯨大和煮の缶詰を製造する工場が設立され，明治41年(1908)には5，6工場，翌42年(1909)には18工場を数えた[109]。川口神社には，鯨漁の豊漁を祈願した大正2年(1913)の奉納絵馬がある。明治43年以降は，銚子近海では鯨群は影を潜め，捕鯨会社と共に缶詰工場も次第に休業・廃業にいたるものが多かったものの，4，5工場残り，これを契機として銚子に缶詰工場が展開することとなった。

大正2年(1913)の「下総銚子全図」には興野地区に乾物商の笠上屋(笠上平八商店)がみられる(第7図)。笠上平八商店では，北海道や東北地方から運送される海産物(干鰯・折昆布・鮭・かずのこ)や銚子で製造された鰹節・塩辛・缶詰などの食料品の小売と卸売とを行なっていた。写真4は，大正期～昭和初期の笠上屋本店の商売の様子を示している。従業員の半纏には「千葉県日魯組」とあり，また「日魯の新巻」と書かれた鮭の看板が

写真4　大正～昭和初期の笠上商店
(笠上和子氏提供)

掲げられている。笠上家には日魯漁業や日本水産からの封筒が残されており，笠上屋は東京の大手会社の代理店としての側面を有していた。昭和18年(1943)に笠上平八は銚子食料品小売信用組合や千葉県水産物卸商業組合の理事長をつとめていることから，銚子ひいては千葉県全体においても，笠上屋が水産加工食品の小売・卸商として屈指の存在であったことが窺える。

その一方で，鰹節や塩辛・缶詰製造を自前の工場で行なっていた。大正13年(1924)に興野の笠上屋本店で鰹節製造を開始した。昭和2年(1927)には缶詰工場が川口町に設立され，鰯をはじめ，秋刀魚・鰹塩辛・鰹大和煮の缶詰を製造していた。後に笠上屋の経営する缶詰工場は飯沼地区の植松町・通町にも展開し，計3ヶ所となった。笠上屋には昭和2年(1927)の6月から8月にかけての鰹の購入伝票が残っている。それによれば，内浜・東浜・飯沼の魚市場から130本もの鰹を購入していた。こうした缶詰製造をはじめとした水産加工工場は，魚市場に近接した飯貝根に集中していた。さらに笠上屋は銚子以外にも宮城県塩釜に缶詰工場を展開していた。昭和15年(1940)の『銚子商工案内』[110]では，銚子の缶詰業について「長崎・北海道地方と共に本邦の三大缶詰産地の一つ」として位置づけている。当時銚子に20工場もの缶詰工場が存在していた。つまり，鰹節や缶詰製造が，鰯搾粕などの肥料生産に加えて大正期～

昭和初期に銚子の代表的産業の一つとなっていた。

町工場から出発し，株式会社組織にまで発展した缶詰会社の一つに信田缶詰がある。信田缶詰は明治38年(1905)に川口町で創業したと伝えている。鯨漁が衰退した後も缶詰製造を続けた。昭和12年(1937)に今宮地区の三軒町に移転し現在に至っている。太平洋戦争に向けて国からの軍用缶詰製造の要請が強まると，昭和16年(1941)に銚子の中小缶詰製造業者，豊田(長塚町)・木之内(通町)・根本(清川町)・笠上(本通町)・明石(三軒町)・熊野(飯沼町)らにより銚子合同缶詰株式会社が創設された。戦後統制経済が解かれると，昭和22年(1947)に根本・信田・豊田・明石がそれぞれ分立し，昭和24年(1949)に田原工場，26年(1951)に木之内工場が復活し，中小規模の缶詰工場が再び生まれた。つまり，地元資本による中小規模の工場展開が銚子において特徴的であると言えよう。

c. 漁港の整備

大正期には，銚子には本銚子町漁業組合・銚子生魚商組合による約10ヶ所の魚市場が展開していたが，大正13年(1924)に新生・内浜・東浜・飯沼の4ヶ所に統合された。魚市場の整理は大正12年(1923)の銚子港修築計画に組み込まれた事業であった。魚市場の経営は千葉県水産株式会社によるもので，その取締役は銚子醤油株式会社社長濱口吉兵衛であった[111]。

大正14年(1925)より銚子漁港の工事が着手された。沖合・遠洋漁業が中心となると，漁船が大型化し，回遊魚の漁場が移動するにつれて船籍をもたない県外船も多く入港するので，泊地も広く，魚市場・輸送設備や製氷工場，修理工場・水産加工場や無線基地などを備えた近代漁港が必要となってきた。そこで，銚子港修築工事は，将来銚子漁港を利用する府県との共同事業とすることとなり，千葉県のほか，東京・神奈川・静岡・愛知・三重・宮城・福島・茨城の各府県に呼びかけ[112]，工事費1,000万円の半額は国庫金で負担し，半額は一府八県で分担させようとした。結局この計画は挫折し，千葉県のみで工事費の半額を負担することになり，濱口吉兵衛をはじめとした銚子の有力な商工業者が私財を投じた。漁港の建設にともなって，石油発動機船が導入され，遠洋漁業がより可能となった。また，鮮魚の水揚高も増していき，鮮魚を食品として加工する水産加工業が銚子で展開していった。

大正期の銚子漁港の整備は，濱口吉兵衛といった銚子の有力な商工業者によって進められた。これは，単に漁港を利用する漁民に利益がもたらされたのみならず，鰯搾粕や缶詰といった水産加工業者，または漁民や水産加工業者に資本投資した興野の商人にとっても多大な利益をもたらしたものと考えられる。

V　おわりに

本稿では，銚子市荒野地区を中心に，港町の形態を復原し，住人の社会的属性や経営に注目しながら，近世から昭和初期の港町銚子の機能とその変容過程について予察的に考察を行なった。

銚子における港町としての中心機能は，利根川河口部に位置し，町場を形成していた飯沼・新生・荒野・今宮の4ヶ村にあったが，廻船の停泊地，高瀬船の避難港，遊廓といった機能まで含めると，その西側の松本・本城・長塚・松岸の4ヶ村を含む，計8ヶ村に渡るものであった。距離は6.5kmにも及び，複数の村にまたがる港町の構造は，銚子の特徴であると思われる。こうした形態が生まれた一背景としては，「銚子」という枠組が昭和8年(1933)の銚子市誕生までみられず，各々の村が個別的に港町の機能を有してきたことが挙げられる。本稿では，港町の形成過程を荒野村と今宮村を事例に検討してきたが，17世紀中期には村に草分けが存在し，紀州を中心とした漁業移民が来住すると，草分けは土地と資本を提供し，川沿いに納屋場が形成された。草分けの一つである信太家と宮内家は名主をつとめ，仙台藩・相馬藩の御穀宿となり，河岸に蔵屋敷が設けられた。荒野村では延宝期(1673～81)に東西の道を基準と

した町割が整備され，通穀町・通明神町などの「町」が形成されたと想定した。18世紀中期には荒野村では納屋場としての機能は消滅し，御穀宿・気仙問屋の倉庫，船宿などが連なる商業集落に変化した。また紀州移民の生業も気仙問屋・五十集仲間・醤油醸造・呉服商など商業的性格を強めていったものと考えられる。つまり，港町の形成は村単位でおこり，銚子全体でみると，自然発生的に形成されたとみることができる。

次に，銚子と取引のあった相馬と三陸地方の問屋資料を素材としつつ，銚子の御穀宿・気仙問屋の機能，ひいては銚子の港町の性格について考察を行なった。相馬藩の御穀船が下る際には，銚子の御穀宿宮内与惣左衛門から砂糖・琉玖・木綿・鉄砂などを輸送していた。これらの商品は薩摩・琉球・三河といった他国の特産物であった。つまり，銚子には諸国の特産物を集荷する問屋が存在していたことが想定される。実際，銚子には近世に和泉・紀州・伊勢・近江といった他地域出身の商人が多数移入しており，しかも，江戸を経由して銚子産・東北産の干鰯・〆粕がこれらの地域に輸送され，その結果，肥料を要する綿などが生産されるという構造がみられた。また，銚子の商人が東北地方への指向を強く持っていたことも特徴として挙げられる。これは，関西漁民が銚子を通って三陸地方へ漁業進出していったこととも呼応する動きであったと考えられる。広屋儀兵衛が南部鉄山の経営に参画したり，銚子地方が不漁の際，銚子の肥料商が三陸方面の魚肥を集荷した事例は，このことを端的に示している。

魚肥の流通から，銚子を中心に利根川水運について検討すると，銚子は広大な後背地をもっていたとみることもできる。銚子産あるいは奥州産の魚肥は，関宿・境河岸を通じて，関東各地の農村にもたらされた。特に南部・仙台産の赤魚粕は境・関宿向きであった。つまり，銚子の仲買問屋は関東各地の商人から単に口銭をとっていたわけではなく，農村の需要に応じて魚肥を運送していた。また，江戸の干鰯問屋からは，銚子は商人が多く，江戸問屋から魚肥の仕入を受けない地域として捉えられていた。銚子では，魚肥を産出する漁師は飯貝根に居住し，その資本を投じたは飯沼村の網主や荒野村の肥料商であった。こうした傾向は，現在においても銚子の水産業や水産加工業の多くが地元資本で，東京の大手資本が参入しにくいといった状況と通じるものがあると考えられる。従来，江戸を中心とした流通構造が重要視されてきたが，銚子はそうした枠のみでは捉えきれない地域であったといえよう。

明治期になると，流通機構の再編成を受けてそれまでの商港としての機能は縮小された。興野地区においても，御穀宿であった大里家が肥料商ならびに運送業へ業種を転換したように，醤油，肥料・鰹節製造・缶詰製造等の水産加工業といった，銚子を基盤とした製造業に比重が増していったことが指摘できる。その一方で，近代においても東北地方とのつながりが引き続き指向されていた。また，缶詰工場の展開にみられるように，東京を中心とした大手資本の関与が少なく，地元資本による工場展開が特徴的であり，こうした地元資本が大正～昭和初期の近代漁港の整備の際に下地となったと考えられる。

本稿では，史料的な制約もあり，従来の研究で重視された問屋資料を収集，活用することがあまりできなかった。この点については，今回検討したように，引き続き東北地方や関東地方の港町・河岸の問屋資料を活用して考察することが必要であると思われる。住人の社会属性については今回草分けに注目したものの，今後は紀州・伊勢といった他国移民の移入のしかた，展開などに注目することも，銚子の町の性格を知る上で重要であろう。また，銚子の漁業や醤油醸造と港町銚子との関係についてもあまり触れることができなかった。これらの点は今後の課題としたい。

付　記

本稿作成にあたり，銚子市文化財審議会委員の永澤謹吾先生には，資料の提供や調査の便宜のほか，多くのご教示を賜りました。銚子市公正図書館，銚

子市青少年文化会館，海上町教育委員会，野田市立興風図書館においては貴重な資料を閲覧させていただきました。浄国寺・威徳寺・東岸寺のご住職，大里庄治郎，笠上和子，保立洋一，宮内治助，丸山正治，太田幸作，武井年雄，木戸秋定雄，前野　勇の各氏には，資料を提供いただいたほか，多くのご教示を賜りました。そのほか，銚子市の多くの方々にご協力をいただきました。八千代国際大学の黒崎千晴先生には，種々ご教示を賜りました。平成８年度・９年度の歴史地理学実習では，筑波大学第一学群人文学類の植松久美子，山田亜砂人，山田英明，蓼沼綾子，宇都宮久，国谷理絵，中島　一，筑波大学大学院歴史・人類学研究科の木城知則の各氏に協力いただきました。以上ここに記して厚くお礼申し上げます。

注および参考文献

1）現在，荒野地区という名称は存在しないが，本稿では近世の荒野村の範囲を荒野地区と表記することとする。この地区は現在の銚子市中央町・双葉町・末広町・東芝町・西芝町などにあたる。明治７年(1874)には荒野から興野と村名の表記が変わるため，本稿では明治期以降については興野と表記する。
2）藤本利治(1976)：『近世都市の地域構造』，古今書院。
3）山田志乃布(1996)：近世後期の港町の機能－松前地江差を事例として－，歴史地理学177，48～61。
4）①高橋康夫他編(1993)：『図集日本都市史』，東京大学出版会。②函館市史編さん委員会編(1995)：『函館市史　住・文化編』，函館市。
5）柚木　学(1971)：近世後期－明治期における風待ち港の船問屋と北前船－雲州鷺浦の「船御改控帳」の分析－，海事史研究17，13～38。
6）田中圭一(1984)：井の中の蛙大海を観る，新潟県史しおり(資料編10)，1～2。
7）仙石鶴義(1979)：下総国海上郡飯沼村における干鰯場の成立と展開，法政史論６，1～22。
8）林　玲子編(1990)：『醤油醸造業史の研究』，吉川弘文館。
9）①渡辺英夫(1990)：慶長一四年銚子築港問題，日本歴史503，1～20。②川名　登(1982)：『河岸に生きる人びと－利根川水運の社会史－』，平凡社。③川名　登(1984)：銚子湊の成立と構造，『近世日本水運史の研究』，雄山閣出版，15～52。
10）船橋市西図書館所蔵。
11）明治45年(1912)東京浅草精行社発行。飯沼観音前の旅館吉野屋平助が配ったものとみられる。
12）根本直三(1983)：『西銚子町誌(復刊)』，銚子市立本城小学校。
13）前掲９)②。
14）年不詳「遊女屋取潰之儀に付太田村他村々願書」，旭市太田加瀬百助家文書，千葉県史編纂審議会編(1958)：『千葉県史料　下総国　上』，千葉県，322～323。
15）①桜井源吉(1987)：『古き時代の銚子と松岸遊廓物語』，銚子市公正図書館。②東京都立教育研究所編(1987)：『千葉県銚子市調査報告書』，東京都立教育研究所，29～30。
16）船橋市西図書館所蔵「下総国海上郡銚子御領分拾七ヶ村記録」。以下「銚子領十七ヶ村記録」と略す。
17）前掲12)。
18）前掲12)。
19）銚子市宇野沢梅吉家文書，文政10年「高崎藩銚子領村々書上帳」，海上町史編さん委員会編(1983)：『海上町史　史料編Ⅱ近世(２)』，海上町役場，798～813。
20）船橋市西図書館所蔵「千葉県銚子港沿革誌」。
21）銚子市田中義家文書「先代集」所収，前掲14)，『千葉県史料　近世篇　下総国上』，425ページ
22）銚子市編纂委員会編(1956)：『銚子市史』，銚子市，826～827。
23）前掲20)に同じ。
24）田中義家文書，前掲19)，185～186。
25）銚子市新生町木戸秋定雄氏所蔵「明治元年木戸秋氏記録控」。
26）前掲20)。
27）前掲20)。
28）詳細は，山澤　学・山下琢巳(1998)：港町銚子における河岸の利用形態と商業活動－飯沼地区を事例として－，歴史地理学調査報告第８号，33～58。
29）前掲20)。
30）前掲19)。
31）前掲20)。
32）前掲20)。
33）①前掲22)，616～617。②銚子市編(1983)：『続銚子市史Ⅲ　昭和後期』，銚子市，103～104。
34）千葉地方法務局銚子出張所所蔵。
35）前掲20)。
36）①『日本地誌提要』。②千葉県編(1962)：『千葉県史　明治編』，千葉県，470ページ。
37）千葉県海上郡教育会編(1917)：『千葉県海上郡誌』，千葉県海上郡教育会，1075～1079。
38）田中祥雄(1974)：『浄国寺史』，浄国寺。
39）ヤマサ醤油株式会社編(1977)：『ヤマサ醤油店

史』，ヤマサ醤油株式会社，95，112ページ。
40) 前掲39)，2～20。
41) 信太正義君追悼集刊行会編(1985)：『信太正義君追悼集』，信毎書籍印刷，159ページ。
42) 前掲39)，64，81ページ。
43) 前掲39)，2～20。
44) 前掲20)。
45) 享和3年(1803)に鵜月八郎左衛門は，荒野村の白幡明神に「白幡宮」と刻した額を寄進している(前掲37)，970ページ)ことから，荒野村への移住はこの頃であったと考えられる。
46) この史料の閲覧には，若宮八幡神社総代の宮内治助，三崎富夫，根本弘之の各氏に協力頂いた。
47) 前掲37)，460～461。
48) 杉原康定(1908)：『銚子案内』，中村書店。
49) 前掲16)。
50) 銚子市高神西町加瀬一男家文書「諸事書留覚」。
51) 前掲37)，893，917ページ。ただし所在地が明神町とあるが，地番と地籍図を対応させると，その位置は下穀町であった。
52) 前掲37)，895ページ。威徳寺での墓地調査による。
53) 銚子市史編さん室の聞き取り調査による。
54) 前掲22)所収。
55) 銚子市公正図書館所蔵「玄蕃日記(写)」，弘化2年8月19日条。
56) 前掲20)。
57) 銚子市東芝町丸山正治家文書，天明2年「浅間山噴火記録」所収。
58) 銚子市新生町永照稲荷所在石碑による。
59) 銚子市田中義家文書「先代集」，前掲21)，420～421。
60) 前掲20)。
61) 岩瀬家文書，「穀仲間帳」，前掲19)，397～398。
62) 前掲39)，41～45。
63) 前掲8)，31～36。
64) 前掲20)。
65) 「浦賀屋系譜記」。この資料に閲覧には銚子市上野町太田幸作氏の協力を得た。
66) 銚子信用金庫編(1986)：『銚子信用金庫七十五年史』，銚子信用金庫，103ページ。
67) 前掲20)。
68) 「先代集」，前掲21)，448ページ。
69) 相馬市史編纂会編(1971)：『相馬市史5　資料編2』，相馬市，pp.488～644。
70) ①細井　計(1994)：『近世の漁村と海産物流通』，河出書房新社。②三陸町史編集委員会編(1991)：『三陸町史第六巻産業編』，三陸町史刊行委員会。
71) 前掲20)。
72) 前掲70)①，196～197。
73) 田中義家文書，前掲22)，355～364。
74) 銚子市公正図書館所蔵，「後代記(写)」。
75) 山口和雄編(1965)：『現代日本産業発達史XIX水産』，交詢会出版局，93ページ。
76) 嘉永3年「銚子鰯粕売捌方調」，銚子市公正図書館古文書を読む会編(1995)：『銚子の古文書　第三集』，銚子市公正図書館，55～60。
77) 原　直史(1994)：「粕干鰯商売取扱方心得書」，論集きんせい16，67～91。
78) 前掲20)。
79) 岩崎宏之(1972)：明治維新期の東京における商人資本の動向，西山松之助編『江戸町人の研究　第一巻』，吉川弘文館，549～647。
80) 小風秀雄(1989)：明治10年代における汽船海運業の動向－郵便汽船三菱会社を中心に－，横浜近代史研究会編『横浜近代経済史研究』，横浜開港資料館，87～120。
81) 前掲22)，625～634。
82) 『日本帝国統計年鑑(第2回，第3回)』。
83) 前掲37)，514～548。
84) 遠藤良雄(1996)：『騎虎奮迅』，大衆日報社。
85) 前掲37)，548～549。
86) 銚子市中央町大里庄治郎家文書，「所得金額申告綴」。
87) 『大日本帝国港湾統計1(明治39・40年版)』，商品流通史研究会編(1978)：『近代日本商品流通史資料第9巻』，日本経済評論社。
88) 渋谷隆一編(1988)：『都道府県別資産家地主総覧千葉編2』，日本図書センター，306～307。
89) 前掲37)，551～552。
90) 国書刊行会編(1986)：『千葉県博覧図　解説』，国書刊行会，89ページ。
91) 銚子市史編さん室の聞き取り調査による。
92) 大里家文書。大里憲文が県会議員選出の際に作成されたものと考えられる。
93) 奥原謹爾(1953)：『関宿誌』，関宿町教育委員会，115～116。
94) ①前掲93)。②東京肥料史刊行会編(1945)：『東京肥料史』，東京肥料史刊行会。
95) 大里庄治郎氏のご教示による。
96) 大里庄治郎氏のご教示による。
97) 銚子市青少年文化会館所蔵。
98) 永澤謹吾氏のご教示による。
99) 銚子市中央町保立洋一家文書。
100) 北村正光編(1992)：『明治後期産業発達史資料』第134巻，龍渓書舎。
101) 千葉県編(1975)：『稿本千葉県誌　上巻(復刊)』，

名著出版，746～767。

102) 保立洋一家文書，明治12年「借用金証」。

103) 船橋市西図書館所蔵。

104) 前掲37)，156～158。前掲８)，231～340。

105) 銚子醤油株式会社編(1972)：『社史』，銚子醤油株式会社。

106) 前掲37)，169～183。前掲８)，231～340。

107) 前掲101)。前掲75)。

108) 前掲48)。

109) 銚子市水産課編(1956)：『銚子の水産』，銚子市，77～80。

110) 銚子商工会議所編(1940)：『銚子商工案内』，銚子商工会議所。

111) ①平田為彦(1934):『魚市場より見たる銚子漁港回顧10年』，千葉県水産株式会社。②銚子市漁業協同組合編(1957):『銚子漁港魚市場の歩み』，銚子市公正図書館。

112) 前掲22)，824～835。